

# 2012 年度 FD 研修会

## 1. FD 研修会

### 「3 学部授業改善の取り組み—拝見 となりの授業実践—」

司会：田中 愛 (FD 実施委員)

日時：2012 年 11 月 1 日 (木)

場所：武蔵大学 8604 教室

#### 1. 研修会企画の趣旨

FD 活動の多様な在り方を探るという意味で、FD 研修会の充実はひとつの大きな課題である。では、より多くの教職員が興味をもち、積極的に参加できる FD 研修会とはどんなものか。本年度実施委員会では、この点について改めて議論を行った。そこで提案された新たな試みが、第 1 回研修会「3 学部授業改善の取り組み—拝見 となりの授業実践—」である。他大学に優れた取り組みがあるのと同様に、本学においても各教員が、授業をより良くするため日々地道に努力を積み重ねていることも事実である。そこで 3 学部の教員に依頼し、武蔵の特色ある教育実践として各自の取り組みを紹介していただくこととした。各教員の様々な取り組みとその工夫について教職員の間で情報を共有し、よりよい授業について考えることが目的である。

#### 2. 登壇者と報告内容

- (1) 高橋徳行氏 (経済学部教授)

「社会人基礎力を伸ばす取り組みと工夫」

- (2) 谷憲治氏 (人文学部教授)

「ハイブリッド e-learning」

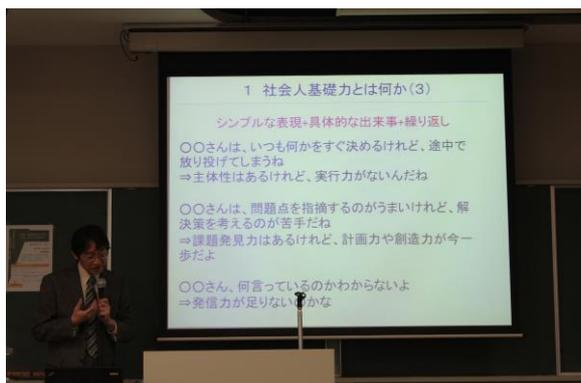
- (3) ジェyson・ホロウェル氏 (人文学部准教授)

「e-Learning を通しての非同期会話コミュニケーション学習法」

- (4) 南田勝也氏 (社会学部教授)

「『ゼミで学ぶスタディスキル』を用いた初年次教育の実践—執筆・編集・発刊から授業運営まで—」

### 3. 報告及びフリーディスカッションの様子



「社会人基礎力」を捉え直すための具体例（高橋氏）

報告は1学部15分とし、3学部の報告終了後フリーディスカッションの時間を40分程度設けた。

高橋氏には、「社会人基礎力を伸ばす取り組みと工夫」として、三学部横断型課題解決プロジェクト（通称：横断ゼミ）における「社会人基礎力」の位置づけと、それをどのように伸ばしていくかについて紹介いただいた。また、経済学部ゼミの一環として個別面談を行い、学生の自己評価能力を高める取り組みが進められているとのことであった。

続いて谷氏・ホロウェル氏からは、英語学習「e-learning」で活用しているメディア教材について報告していただいた。語学学習では特に、学生の継続的な自主学習が必要となること、またその習得には相手との相互のやりとりが不可欠であることを踏まえた自主学習用のソフトが開発され、実際の授業に生かされている様子が紹介された。



e-learning に利用されている教材の紹介（谷氏・ホロウェル氏）

そして南田氏からは、社会学部教員が協同して作成した初年次ゼミのテキストを紹介いただいた。レポート・論文作成の基礎スキル習得という課題に、学部全体で取り組むためのものであり、効果的なゼミ運営のために教員側の使いやすさにも配慮されているとのこと。他大学・他学部にも採用されており、学生からも高く評価されているようであった。



初年次共通テキストの紹介（南田氏）



ゼミ運営に関する問題の共有（フリーディスカッション）

3 学部からの報告の後、フリーディスカッションの時間を設けた。参加者からは、ゼミの最中に学生から発言を引き出していく際に苦労すること、基礎学力や学業に対する意欲の差の問題が提示され、会場全体が一体となる場面もあった。登壇した先生方からは、具体的な解決策について個別対応しながら試行錯誤していることを事例を踏まえてコメントいただき、3 学部に共通する授業運営の課題が共有された。また、社会学部テキストの活用に関しては、学部を越えて有効活用したいとの意見も出た。

#### 4. まとめ—研修会終了後の参加者アンケートから

研修会終了後、参加者へアンケートをお願いし、研修会の内容と設定について様々なご意見を賜った。以下にその一部を紹介したい。

- ・年次・科目別に到達目標を明確にした授業運営で、かつ方法のバリエーションを含めて実践例を紹介していただき、参考になった。また、ゼミの学生参加についての仕掛けも共感するところが多く、示された具体的な取り組みも試行してみたい。
- ・各学部の共通した課題の指摘もあり、学生の積極的な授業参加を促す実践的取り組みとして三者三様に興味深かった。
- ・授業の際の悩みは皆同じで、ある程度時間（と労力）をかけて工夫していくしかないということがわかりました。とくに、学生のモチベーションに関して。発表時間は、あと 5 分ずつ取っても飽きない内容でした。

登壇いただいた 4 名の先生方のご尽力により、上記のような好評の回答を多く得ることができた点は、今回の一番の成果である。今後もこのような情報共有について教職員のニーズが見込まれるし、学内の貴重な人材をフルに活かした研修を活発に行っていくことには意味があると考えられる。

その際には、アンケートにおいて意見が寄せられたように、報告時間を十分に確保すること、問題点と解決策を皆で共有できるようテーマを絞っていくこと、大規模講義と少人数ゼミのように、授業形態の違いを考慮に入れること等が課題となるであろう。

## 2. FD 学生フォーラム

### 「学生と共に考える授業改善」

司会：古瀬 公博 (FD 実施委員)

日時：2013 年 3 月 7 日 (木)

場所：武蔵大学 1203 教室

#### <内容と趣旨>

昨年度に続き、本年度の FD フォーラムでも、学生の視点から本学の教育内容の問題点を考えるべく、フォーラムでの発表者を学生から募り、そのアイデアをもとに議論するという形式をとった。今回のフォーラムでは、経済学部から 2 名、人文学部から 1 組 3 名、社会学部から 1 名（なお、もう 1 名応募者がいたが、当日は都合により参加できず、資料のみ配布した）が発表者として参加した。

#### <発表者一覧>

羽鳥 弘高	経済学部 経済学科 2 年
横田 寛	経済学部 経営学科 2 年
塩澤 瞳 田代 洋子 山川 晏奈	人文学部 ヨーロッパ比較文化学科 4 年
近藤 有香	社会学部 社会学科 3 年
落合 志保	社会学部 社会学科 1 年 (資料のみ配付)

#### <内容>

発表者からはさまざまな視点からの意見が出されたが、以下の 4 点に要約して紹介したい。

#### 1. 教務運営面の課題

第 1 に、教務運営面での課題が指摘された。具体的には、

- A) 現状の 3S が学生にとって使いにくいものであり、また、教員によっても十分に活用されていないという指摘がなされた。授業資料の掲示や定期試験の回答の開示など、教員側による利用の拡充が学生から期待されていることが伺えた。
- B) 試験・評価に関する学生へのフィードバックが不十分であるという指摘もあった。上の点と重複するが、試験の回答や評価の傾向などについて、できるだけ早く情報を開示して欲しいという声が聞かれた。また、試験・評価以外の面でも、授業内容に関する質問など、さまざまな点で教員と学生との間のコミュニケーションが促進されるべきであるという要望があった。
- C) 授業評価アンケートの利用実態が不明確であるという指摘もあった。授業評価アンケートが実際に教育改善に活用されているのか、アンケート結果を学生に開示すべきなのではないか、などの意見があった。授業評価アンケートの活用については、FD 実施委員会

でも検討している点であり、今後、その活用形態について具体的に示していく必要性が感じられた。

## 2. 語学教育

第2に、主に人文学部の学生から、語学教育の充実化を望む声が聞かれた。具体的には、外国語で行う語学クラスと一般の講義を増やしてほしいという意見であった。それに対して、フロアの教員からは、教員としても力を入れていきたい点であるが、外国語での授業を理解できる学生がどれくらいいるのか、その点をクリアできなければ実施は難しい、という趣旨の反応があった。また、経済学部の学生からは、卒業単位に換算される語学授業の単位数が少ないため、語学の学習機会が制約されているという点が指摘された。

## 3. キャリア教育

第3に、キャリア教育についても改善案が示された。現状のキャリア教育は、キャリア＝会社への就職、という枠組みで考えられており、より多様なキャリアの在り方が十分に示されていないという声が聞かれた。具体的には、大学院への進学や、NPO、農業などに従事するといったキャリアである。キャリア関連の授業やセミナーで招かれる講師についても、一般企業からだけでなく、NPOで活躍している人など多様性をもたせて欲しいという要望があった。

## 4. 少人数教育

最後に、武蔵大学の特徴である少人数教育の課題についても指摘があった。a) 本学は「ゼミの武蔵」という看板を掲げているものの、それに見合うだけの活動がされているか、という厳しい指摘がなされた。「ゼミの武蔵」を名実ともに実現するために、個々のゼミの活性化とともに、ゼミ間で交流をもつ機会を増やしたり、学生が複数のゼミを履修できる制度を導入したりすることが提案された。現状でも、個々のゼミでは質の高い教育がなされているが、より大学全体としてゼミ活動の底上げを図っていく必要性が感じられた。b) また、ゼミ以外でも、小規模授業の拡充を期待する声が聞かれた。講義に関しても、履修者を適正水準に維持し、授業中の静穏な環境を維持すること、また、数十人程度に履修者を限ったディスカッションを重視する授業を増やすことなどが要望として挙げられた。ゼミ・講義を含めた少人数教育を充実させていくことが武蔵大学の特徴を活かした教育になるということは、学生からも強く期待されている点であることが理解された。



発表者挨拶



聴講者と活発な意見交換が行われた

### 3. 大学院 FD 懇談会

司会：八木 清治 (FD 実施委員)

日時：2012 年 7 月 28 日 (木)

場所：武蔵大学 88-H 教室

#### <出席者>

大学院生	経済学研究科 (博士後期課程 2 名) 人文科学研究科 (博士前期課程 8 名、博士後期課程 1 名)
専任教員	板垣経済学研究科委員長 光野人文科学研究科委員長 西村 FD 実施委員長 八木 FD 実施委員 (人文科学研究科教務委員長) 古瀬 FD 実施委員

(オブザーバー：中島企画課長)

#### <内容>

学部で行っている学生による授業評価アンケートに代替するものとして、以下の通り懇談会の形式で意見徴収を行い、改善できる点についてはフィードバックすることとした。

##### 1) TA 業務での教材印刷について

院生意見： 教授研究棟 1 階のコピー室での作業について、職員の方の手続説明にバラつきがある。ルールを明文化して、情報の共有が必要と思われる。

教員回答： 教材印刷は、研究資料の印刷より優先されるべきであろう。また、教材印刷においては、作業する人 (専任教員、非常勤講師、TA) によって優先順位があることはない。大量印刷の時には、急ぎの人に譲るなどのマナーは大切である。

##### 2) 東門の閉門時間について

院生意見： 情報・メディア教育センターや大学図書館が 8 時閉館で、東門が同じ 8 時閉門では利用できず不便である。規則通りではなく、臨機応変に融通してもらえないか。

教員回答： 職員の大半が非正規職員となっており、そのような職員が「融通」という裁量を行うのは難しい。規則で運用せざるを得ない。

##### 3) 図書館 B1 のコピー機について

院生意見： 生協でのコピーカード利用を可能にしてほしい。

教員回答： コピー機の導入経緯でコピーカード設備が困難であるのかもしれない。

##### 4) 院生室の OA 機器について

院生意見： リース切れで定期メンテナンスがされないため故障が多い。大学庶務課に連

絡して修理してもらっているが不便である。

5) 院生室のコピー機について

院生意見： 欧米専攻・日文専攻のコピー機のカラー解像度が低くて不便である。社会専攻のコピー機は、純正トナーが高くて購入できないため故障が多い。

6) 図書館の改装について

院生意見： 参考図書の取り置き選択において、教員の協力を得られず残念であった。維持費を支払っているのに利用できないのは、入学時の説明責任に欠ける。

教員回答： 1フロアずつ工事する3年度計画もあったが、急遽全館工事が決定され、教員への正式案内は院生よりも遅かった。

7) 害虫対策について

院生意見： 院生室の害虫対策はなされているか。

教員回答： 大学庶務課で相談すること。

8) TAの募集方法について

院生意見： TAの募集方法が不明で応募できない。

教員回答： 公募はしておらず、教員が個人的に依頼している。今後は院生会を通す方法も検討する。予算増の申請も検討したい。

<総括>

昨年度より始まった大学院懇談会(ヒアリング)は、今年度から大学院のFDの公式行事として実施することとなった。当初は年に2度を予定していたが、諸般の事情で年度末に行なうことは難しく、特に院生側からの要請があった場合にかぎり2回目を開くように改めた。今年度は7月末に1回開催しただけであったが、上記のように、院生側と教員側との活発な意見交換が行われ、院生の希望・要求の把握に大いに役立ったといえる。

院生の要求の大半は、施設の管理、環境の改善、機器備品、TA業務に関することであり、教育内容に直接踏み込んだものはなかった。大学院生の数が少なく、院生とその指導教授が教育の場で親密に交わることができるため、個々の院生に行き届いた指導が担保されていると見なすことはできる。その意味で少人数教育は有効に機能していることは確かだが、そうした満足度の高さゆえに、教員に対する院生の依存度も高くなっているようにも思われる。個々の院生の意見は多様であるけれども、分散的かつ細分化されていて、まとまりのある一つの大きな要求として成立しにくい。院生同士の横のつながりも希薄で、院生会のような組織も存在しないため、合理的建設的な問題解決への主体的な取り組みなどが弱いという問題を抱えている。

今後、ただ多くの問題を羅列するだけにとどまらず、院生側に個々の意見を集約し、またそれらの優先順位を決めることなどを求め、FD活動として適切かつ実効性をもつ懇談会にするよう努めなければならないだろう。